

『魅惑の甘露 ～幼妻はハーフヴァンパイア～』

著：真崎ひかる

ill：明神 翼

「杏樹。……入るからね」

返事がないことは想定済みだったので、おざなりなノックをして扉を開ける。

杏樹の寝室は、昼夜を問わずカーテンが閉め切られている。すっかり陽が沈んだ今では、ほぼ闇に包まれていた。

歩望は、ゆっくりとベッドに近づいて……やっぱりふて寝している、と密やかな苦笑を滲ませる。

「ルキは帰ったよ」

「……今度来ても、屋敷に入れるな」

ルキフェルの訪問を受けた後は、毎回、同じことを言っている。それでも玄関払いをしないのは、杏樹も心底ルキフェルを嫌っているわけではないのだ。

今の杏樹は、正しくルキフェル曰く『拗ねている』状態で、歩望は笑ってしまいそうになるのをギリギリのところで堪えた。

ここで笑ったことが杏樹に知られば、一週間は寝室に籠もってしまうだろう。ますますフォローが大変になる。

「なにをしに来た」

「お腹、空いてないかな……と思って。夜は、食事に行くの？ 外出が面倒だったら、おれで済ませたらいいのに」

そうして、他の人間の血を吸いに行くな……と遠回しに訴えていることが、杏樹に伝わってしまうだろうか。

緊張しつつ答えを待っていると、こんもりと膨らんだベッドカバーがゴソリと動いた。

わずかなカーテンの隙間から、ほんの少し差し込む外灯の明かりが、杏樹の様子をハッキリと見せてくれる。

「歩望」

低く名前を呼びながら片手を差し伸べられて、うなずいた。ベッドに膝を乗せると、杏樹の傍らに潜り込む。

「好きなだけ吸っていいよ。フレイに、造血効果があるっていうご飯を作ってもらおうし」

「……必要以上はいらん」

ボソッと答えた杏樹が、歩望の着ているシャツのボタンを外す。襟元から三分の一ほどを外して、スルリと首筋を撫でてきた。

ひんやりとした手が肌を這う感触に、歩望の意思とは関係なく肩が震えてしまう。

「冷たいか」

「冷たくないわけじゃないけど……杏樹の体温だな、って思うだけだ」

嫌がっているのではないからと、態度で示すべく杏樹の手の甲に自分の手を重ねる。

歩望の肌に触れている手のひらと、重ねた手の甲側と……両方から、ぬくもりが伝わっているはずだ。

「おまえのぬくもりは、悪くない」

「うん」

体温のない杏樹は、半分人間で未だに体温を残している歩望から暖を取ろうとするかのように、抱き寄せてくる。

杏樹自身は、身体が冷たいからといって寒いわけではないと言うけれど、冬場などは動きが鈍いのだ。

杏樹の腕の中に抱き込まれると、ほとんど鼓動を打つことのない歩望の心臓が、脈動を思い出したかのようにトクン……トクンと震える。

ここに来てすぐの頃は、得体の知れない杏樹が苦手だった。死にかけていたのなら、そのまま放っておいてくれてもよかったのに……と思ったこともある。

でも今では、フレイヤやケルベロス、ウルラと生活を共にするのにもすっかり慣れてしまった。

杏樹に血を提供したり、逆に一口、二口……貰ったりするのも、嫌いではない。嫌いどころか、自らこうして杏樹のベッドに潜り込む。

他の誰かとベッドを共にして血を得るのなら、好きなだけ自分の血を吸い上げればいい……と望んで、うなじを曝け出す。

「咬むぞ。力を抜け」

「ん……」

低く予告された歩望は、肩の力を抜いて杏樹に身を任せた。身体に力が入っていたら筋肉が硬くなって、牙を食い込ませ辛くなるらしい。

首筋に舌を這わせて、狙いを定め……やわらかく冷たい唇が触れる。

「ん……、ッ……は」

歩望が細く息を吐くのにタイミングを合わせて、じわじわと尖った牙が埋められる。鋭い痛みを感じた数秒後には感覚が麻痺し、首筋に穿たれた牙の存在だけがリアルになる。

この時だけは、歩望の心臓が普段より遥かに早く脈打って、血管に血を送り出す。杏樹に与えようとするかのように、全身を巡る血を……じっくりと吸い上げられる。

杏樹はいつも、フルコースか懐石料理を楽しむ人間のように、たっぷりと時間をかけてわずかな血を吸い出す。

コク……と喉を鳴らす小さな音が聞こえると、この血を味わっているのだと……好んでくれているのだと言葉ではなく伝わってきて、歓喜が胸の奥から湧き上がる。

歩望が震える手で杏樹の背中を抱いた意味をどう捉えたのか、更に深く食い込んできた牙に小さく身体を跳ね上げさせた。

「あ、んっ……あッ！」

背中に手を回し、制止しようとしたわけではない。もっと……杏樹を傍に感じようとしただけだ。

そう言いたいのに、上手く言葉にならない。

牙を埋められている場所が甘く疼き、奇妙な熱が波紋のように広がっていく。

「杏樹……、あ！」

「ッ、……吸いすぎるところだった」

身体の内側で膨れ上がる熱を持って余した歩望が、ビクッと背中を反らした直後、深く埋められていた牙が唐突に引き抜かれた。

「歩望。……大丈夫か」

大きな手で前髪を掻き上げられて、顔を覗き込んでくる。

額に落ちるのは、銀色の髪……歩望を見据えるのは、翠色の瞳だ。何度目にしても見飽きることのない美しい容貌に、ふっと唇に微笑を滲ませた。

「今日も、キレーだ。杏樹」

「……そんなことが言えるなら、大丈夫そうだな。一口、飲んでおけ」

「う、ん」

自分の手首に噛みついた杏樹が、ゆっくりと顔を寄せてきた。唇が重なり、舌の上へトロリと広がる強烈な甘露が注ぎ込まれる。

甘くて……甘くて、思考が白く霞む。

ルキフェルの言っていた言葉が、ふと頭に浮かんだ。正式な眷属になれば、更に血の味が変わってもっと甘くなる……と。今でも充分甘いのに、これ以上甘美なものが存在するのかと不思議になる。

杏樹の首に腕を絡みつかせて引き寄せ、「もっと」と求めたのに……杏樹は応じてくれず、歩望の舌先を軽く噛んで唇を離してしまった。

「これで、動くのに支障はないだろう。摂りすぎるな」

「おれ、いいよ。……杏樹の眷属になっても」

「……………」

歩望の声は小さなものだったけれど、杏樹には聞こえていたはずだ。それなのに、ポンと頭に軽く手を置いて密着していた身体を離す。

杏樹がベッドから足を下ろすと、歩望は横たわっていた大きなベッドに起き上がって広い背中を見詰めた。

カーテンの隙間からわずかな光が差し込んでいても、普通の人間ならここまでハッキリと見えないと思う。

今の歩望は、杏樹やあの三人には劣ると思うけれど、一般的な人間よりは遥かに夜目が利き、杏樹の姿をきちんと捉えることができる。

杏樹は、歩望を振り返ろうとしない。言葉もない。

「杏樹」

名前を呼ぶと、ほんの少し頭が動くのがわかった。

「ルキフェルが、眷属がどうのとふざけたことを言っていたせいか？」

「違うっ。おれは、おれの意思で……」

「闇の存在になるということが、どんなことか……おまえはよくわからないから、言えるんだ。軽々しく口にするんじゃない」

「確かに、よくわかってないかもしれないけど……軽々しくない」

グッと拳を握って反論した歩望に、もうなにも言ってくれない。

窓際に立ち、左右の手で掴んだカーテンを開けると、外からの光が差し込んで杏樹の姿が鮮やかに歩望の目に映った。

「この気配は……フレイが、食事の準備をしているな。……しっかり食って育ち、美味しい血を作れ」

歩望を寝室から追い出そうとしているかのような言葉に、うな垂れる。

人の食事を摂りながら、杏樹の血を甘露に感じる歩望は、中途半端な存在だ。

人ではない。ヴァンパイアでもない。

成長速度は鈍いが、育たないわけではない。完全なヴァンパイアとは違い、病や怪我で死に至ることもある。

一口、二口と杏樹の血を摂取していても、日々の生活で消費されてしまう。最初に杏樹から与えられた大量の血は、やがて薄くなり……ヴァンパイアとしての効力が消え、いつか歩望はただの人に戻る。

それを、杏樹はどう考えているのだろう。

退屈凌ぎのオモチャとして飽きることなく遊ぶ、暇潰しの期間としてはちょうどいい……くらいに思っているのだろうか。

家事全般を担うフレイヤや、優秀な番犬であるケルベロスや、一族間の連絡係として執事のように杏樹をサポートするウルラとは違う。

歩望は、杏樹にとってなくてはならない存在ではない……と自覚している。

それとも、人間に戻ったと同時に歩望の血を吸い尽くし、この屋敷や自分たちの存在を世間に漏らすことのないよう口封じをするつもりか？

……それでも、いいかな。

「おれの血が美味しかったら……嬉しい？」

「なんだ、いきなり」

歩望の唐突な一言に、杏樹は訝しげな声で聞き返してくる。唇を引き結んでジッと目を合わせていると、仕方なさそうに答えてくれた。

「まあ、不味いよりはいい」

「わかった。……美味しい血を飲んでもらえるように、ご飯……食べる」

ベッドから飛び下りた歩望は、早足で出入り口に向かう。ノブを掴んでドアを開け、廊下に一步踏み出して杏樹を振り向いた。

「もっと飲みたい……って、自制ができなくなるくらい美味しくなってやるからな」

「……ああ。そういえば、デブにしてやるとも言っていたか」

「そうだよっ。覚悟しろ。モデル体型からビア樽体型になっても、泣くなよ」

飄々と言い返されるのが悔しくて、そんな捨て台詞を吐くとドアを閉めた。

……捨て台詞としては迫力に欠けていたし、ちょっと……かなり不恰好なものだったかもしれない。

「拒まれるからムキになってるだけなのか、本当に杏樹の眷属になりたいのか……わかんなくなってきた」

杏樹の真意がわからないから、二人して意地の張り合いをしているだけののような気がしてきた。

それとも、杏樹には歩望を眷属にしたいくない明確な理由が存在する？

歩望は.....どこまで本気で、杏樹曰く『闇の存在』になろうと思っているのだろう。

「よく、知らない.....って、杏樹が教えてくれないんじゃないか」

最初から、杏樹の血の効果が消えるまで.....期間限定だと決めていたせいか、杏樹は歩望に肝心なことをなにも教えてくれない。

杏樹と、従兄弟のルキフェル.....その他には、どれくらいの数の一族がいるのだろう。

人からヴァンパイアへの生まれ変わりが失敗したら、骨も残らず消滅すると聞いたが、その方法は？

ルキフェルは冗談っぽく「僕が咬んであげようか」と口にするけれど、そうしたところで歩望はハーフではなくきちんとしたヴァンパイアになるのか？

「.....わかんないことばかりだ」

三年以上も一緒にいるのに、知らないことのほうが多いかもしれない.....と、今更ながら気がついて愕然とする。

この三年で、歩望の心情は、杏樹とできるだけ一緒にいたい.....と思うように変化した。

歩望の三年は、意識が変わる程度には長かった。千年以上を生きている杏樹の三年は.....一瞬で、意識が変わるほどの時間経過ではない？

杏樹は、歩望を拾った日から変わらないのだろうか。

今でも、退屈凌ぎのオモチャで、非常食で.....それだけ？

「千歳オーバーのおじいちゃんは、頑固だろうからな」

そんなふうに独り言で憎まれ口を叩いても、沈んだ気分のままで.....笑うことはできなかった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>